

都市研究の移動論的転回

—「社会を越える社会学」を越えて—

遠藤英樹

I. はじめに——都市の不思議

ニューヨーク、ロサンゼルス、ロンドン、パリ、東京、大阪。これら都市は、不思議さに満ち溢れている。夕暮れがせまる都市の交差点で信号待ちをしているとしよう。そんなとき、何となく寂しくて、孤独で、人恋しいと思った経験がないだろうか。都市にいるとき周りをみわたしてみると多くの人がいるのに、私たちは「孤独」を感じて、「人恋しい」と思ってしまう。多くの人が集まっているのに、孤独。孤独なのに、たくさんの人がある。どうして都市では、そんなことがおこるのだろうか？

都市の不思議さに魅せられるかのように、その理由を考えた社会学者がいる。ゲオルグ・ジンメルというドイツの社会学者である。ジンメルは、ドイツのベルリンという大都市やそこに生きる人々の人間関係を観察し、都市の匿名性こそが、その理由だと考える¹⁾。

都市にはたしかにたくさんの人があるが、それは、お互いの名前も知らないような、^{ストレンジャー}見知らぬ者同士が集まっているだけである。すれ違った次の瞬間には、どのような顔だったのかさえ忘れているかもしれない。誰でもないし、誰でもいい人間関係だ。それを非人格的な人間関係と言うが、そうした人間関係のもとでは、いくら多く集っていても人は孤独なのだとジンメルは言う。

しかし、そのことは決して、お互いに無関心であるということの意味しているわけではない。たとえば、都市の交差点で誰かが刃物をちらつかせて歩いていたりしたら、私たちはすぐにそのことを察知する。それは、お互いがお互いを注視し合っているからだ。ただ、だからといって相手のことをじろじろ見たりしない。相手の動きを気にしてはいるが、非人格的な人間関係を維持できるよう、「何気なく」気にしているのである。

つまり私たちは都市において、「他者に無関心」でいるのではなく、「他者に無関心な関心をよせている」のだと言えるだろう。アメリカの社会学であるアーヴィング・ゴフマンは、このことを「儀礼的無関心」という表現で述べている²⁾。

私たちは街なかで、相手が刃物をもって歩いていないかなど、いろいろと気にしてはいる。しかし「すぐに視線をそらし、相手に対して特別の好奇心や特別の意図がないことを示す」。そうすることで、お互いの人間関係が保たれているのが、都市という場所である。

II. 「社会的実験室」としての都市——シカゴ学派における都市論

こうしてみると、都市とは、単に物理的な場所であるというにとどまらず、人が集まり日々様々な行為を繰り返し多くの「思い」をもちよっている場所なのである^{3)・4)}。つまり都市とは、人々の

「行為」「想い」が凝縮された場所なのだ。そのため社会における人々の「人間関係」「行為」「想い」が、とても分かりやすく観察できる場所なのだとさえよう⁵⁾。

ロバート・パークというアメリカの社会学者も、都市が「人間性と社会過程を、もっとも有効かつ有利に研究しうる実験室」のようだと述べる。彼は、都市を「社会の実験室」のようなものだと考え、都市社会学という領域をきりひらいていく。ロバート・パークをはじめとする数人の社会学者たちは、ジンメル社会学に影響をうけながら、20世紀初頭のアメリカ合衆国シカゴという大都市を舞台に都市社会学を開花させ、「シカゴ学派」という都市研究の流れをつくりだしていったのである⁶⁾。

この「シカゴ学派」においてアーネスト・バージェスという社会学者が考えた「同心円理論」は、都市の構造を考えたものとして、いまなお重要な理論である。バージェスは当時のシカゴを観察した結果、都市が①中心ビジネス地区（CBD：Central Business District）、②遷移地帯（都市発展の過程で取残されたスラムなど低所得者の居住地帯）、③労働者住宅地帯、④一般住宅地帯、⑤通勤者住宅地帯へと同心円的に広がっていくと考えた⁷⁾。

またパークやバージェスはフィールドワークを主体とした研究方法を大学院生に推奨し、数々の「シカゴ・モノグラフ」の産出をうながしていった。「シカゴ・モノグラフ」では、都市の中のスラム街、貧民窟、繁華街などの場所を歩き、ホームレスや暴力団や不良少年など様々な人々と接し、都市の中で人々がどのような行為を行い、どのような思いを抱いているのかが調べられていった。

そのひとつに、ネルス・アンダーソン『ホーボー』という書物がある⁸⁾。これは、シカゴ中心部の南西のはずれ「ウェストマディソン・ストリート」にかつて集住していた「ホーボー」と呼ばれるホームレスの渡り労働者の生活を描いたものである。またハーベイ・W. ゴーボー『ゴールドコー



図1 シカゴの風景
資料出典：筆者撮影（2000.02.26）

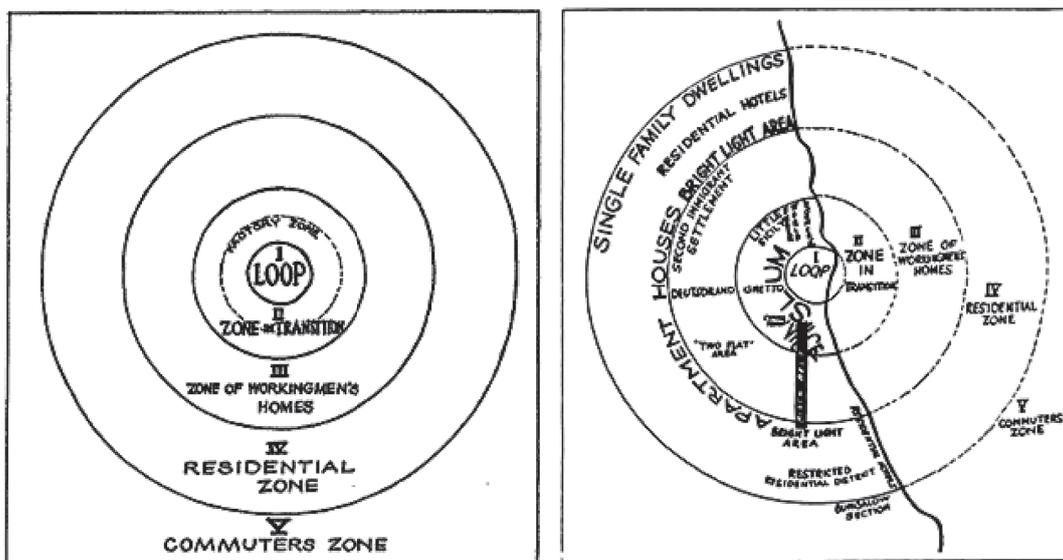


図2 バージェスによる「都市の同心円構造」に関する図
資料出典：Park R.E. & Burgess E.W. (1925)

ストとスラム』という著書もそうだ⁹⁾。そこでは「同心円理論」をうまく活用しつつ、高級住宅街「ゴールドコースト」と、そのすぐ西側に隣接する「スラム」との対照性がシカゴのフィールドワークから浮き彫りにされている。

では、どうして20世紀初頭のシカゴにおいて、これほどまでに都市社会学がさかんに行われるようになったのだろうか¹⁰⁾。——それは、シカゴという都市が社会のあり方と密接に結びついてきたからだ。19世紀後半から20世紀前半にかけて、東欧や南欧から多くの移民が当時のシカゴに流入してきた。当時、この移民の存在が、アメリカ社会に大きな衝撃をあたえていたのである。

東欧や南欧からやってきた移民たちの中には、生活がままならずギャングになったり、非行に走りたりする人がたくさんでて、貧富の格差も拡大した。これらの都市問題を明らかにし、移民という「人々の移動」がアメリカ社会にもたらしたインパクトをとらえようとしたのが、「シカゴ学派」だったのである。

Ⅲ. シカゴ学派からロサンゼルス学派へ

しかしながら20世紀後半になると、都市研究の中心は、シカゴからロサンゼルスへと移っていく¹¹⁾。都市研究の拠点がシカゴからロサンゼルスへと、まさに「移動」したのである。なぜか？——ロサンゼルスという都市が、アメリカ社会に新たな経験をもたらしたからだ。

ヒスパニック系の移民が多く移り住むだけではなく、自動車という交通移動手段を前提にして形成されたロサンゼルスでは、IT企業をはじめ多くの多国籍企業がひしめき合い、人、モノ、資本、情報などの多種多様なモビリティが都市を大きく変容させていった。その中でシカゴ学派が考えたような都市理論では、ロサンゼルスにおける都市の経験をうまく説明できなくなってきたのだ。

たとえばロサンゼルスでは、ゲーティッド・コミュニティもできはじめ、それも新たな課題となっていた。ゲーティッド・コミュニティとは、周囲をゲートで囲い、住民以外の敷地内への出入りを制限した街のことである。ロサンゼルス市では富裕層たちが山の手に住み、このゲーティッド・コミュニティを形成していたりしていた。そしてヒスパニック系や「黒人」と言われるアフリカ系アメリカ人たちに多い貧困層の人たちから、同じ都市にしながら、自分たちを隔離させて暮らすようになり、防犯を徹底させようとしたのである。こうしてゲーティッド・コミュニティによって、人種間や階層間のセグリゲーションが起こっていったのだ。

その結果、ロサンゼルスでは、こうして富裕層の「白人」たちがゲーティッド・コミュニティ内部の高級住宅に暮らすようになるとともに、都市の中心部の地域がスラム化するインナーシティ現象も生じていったのである。その地域で貧困にあえぎながら暮らすアフリカ系アメリカ人の若



図3 ロサンゼルスの風景
資料出典：筆者撮影（2019.09.21）

者たちが、みずからの文化的表現として発展させていったものが、ヒップホップ・カルチャーである¹²⁾。N.W.A というグループや、そのグループを脱退した Dr. Dre などは、ロサンゼルスで育ったミュージシャンたちだ。彼らは西海岸を中心に音楽活動を開始しており、その一部にはドラッグ、暴力、犯罪などを煽りたてるような過激な歌詞をもったものが目立ち「ギャングスタ・ラップ」と呼ばれている。



図4 N.W.Aの曲で登場する街コンプトン

資料出典：<https://www.latimes.com/entertainment/music/la-et-ms-hip-hop-rosecrans-20180118-htlstory.html> (2020.09.14 アクセス)

ロサンゼルスという都市は、人、モノ、資本、情報などの多種多様なモビリティによって大きく変容し、シカゴにはなかった新たな都市の経験を人々にもたらし始めたのだと言えよう。マイク・デイヴィスという都市社会学者も、『要塞都市 LA』という本の中で、ロサンゼルス事例としてゲートティッド・コミュニティが人びとにもたらした社会の分断を論じている¹³⁾。その際デイヴィスは、このようなゲートティッド・コミュニティによって安心感が高まるどころか、逆にゲートを囲うことで、社会の分断がすすみ、自分たちと異なる民族・階層に属する他者に対する不安やおそれが増幅されるのだと主張する。それはまるで城壁に囲まれた中世都市のごとく、他者を侵略者のように扱うことになる。デイヴィスは考え、ロサンゼルスという「近代」的都市が「再封建化」しているのだと述べる。

ほかにアラン・J. スコットやエドワード・ソジャといった研究者も、ロサンゼルス事例にしながらか都市の地理学を展開している¹⁴⁾。こうしてシカゴからロサンゼルスへと研究の対象を移した社会学者や地理学者は、次第に「ロサンゼルス学派」という流れをつくりだしていくことになったのである。

IV. ツーリズム・モビリティが都市にもたらすインパクト

しかしながら、ロサンゼルスという都市が社会にもたらしたインパクトを考えようとするなら、それだけでは、不十分である。ロサンゼルス郊外には、アナハイムという街があるが、都市と社会の関わり合いから、この街を考えると、ツーリズムというモビリティを無視して考えることは決し

てできないだろう。



図5 アナハイムの街並み

資料出典：<https://www.nytimes.com/2018/12/20/travel/what-to-do-anaheim.html> (2020.09.14 アクセス)

ロサンゼルス郊外にあるアナハイムという街は、まさにディズニーランドというテーマパークによって大きく作りかえられた場所である。社会学では、テーマパークを中心に、ショッピングモール、レストラン、シネマコンプレックス、ホテル、さまざまなアトラクション施設などを構成要素として成り立っている都市のことを、「テーマパーク化する都市」と言うが、アナハイムはまさに「テーマパーク化する都市」なのである¹⁵⁾。

アナハイムという街をとらえるためには、ディズニーランドというテーマパークがどのように都市の特徴を変えていくのかを考える必要がある。ジョン・ハニガンという都市社会学者は、テーマパークが大きく影響を与えるような都市のことを「ファンタジー・シティ」と呼び、その特徴を6つ挙げる¹⁶⁾。

①テーマ性

「テーマ性」とは、都市がある統一したテーマのイメージのもとでつくられているということの意味する。ロサンゼルスを中心地から、クルマで1時間30分ほど走ったところにアナハイムという街があるが、そこに到着すると、突然、ディズニーランド色に染め上げられた街が現れる。

②ブランド性

「ブランド性」とは、その場所がブランド化されていることを表す言葉である。つまり、その場所へ行って来たというだけで、なにか楽しい経験をしてきたと思わせるような街が、都市のブランド性なのである。

③24時間性

眠らない街となっているのが、「24時間性」である。アナハイムへ行くと、ホテル、ショッピングモール、レストランなど、どこかが必ず24時間営業をしている。

④モジュール性

ショッピングモール、レストラン、シネマコンプレックス、ホテル、さまざまなアトラクション施設などを「構成要素」としているのが、この都市の特徴である。

⑤孤立性

「孤立性」は、周囲の環境から隔絶していることを意味している。アナハイムという街は、その外部にある街と風景も街のつくりも明らかに違っているのである。

⑥虚構性

テーマパークの中をみれば一目瞭然であるが、ここではARやVRなどのバーチャルなテクノロジーを駆使して、現実と仮想の区別をあいまいにしていることが分かる。

このように、アナハイムという「ファンタジー・シティ」のようにツーリズムと密接に関わりながら形成される都市が現れるようになってきているのだとすれば、従来から堀野が示唆しているように、都市のあり方を考えるうえでツーリズム・モビリティを考察することは不可欠になっているのではないだろうか¹⁷⁾。

V. 「モビリティ 3.0」時代の都市とツーリズム

そして20世紀後半になると、都市を変容させてきた多種多様なモビリティは、その強度をますます強めていく。ピーター・エイディーは、現在「世界が移動し続けているということを私たちははや無視することはできない」と主張する¹⁸⁾。彼は言う。

これまでにないほど、いま世界は移動し続けている。モビリティは遍在していると言っても良いのかもしれない。すなわち、私たちはほとんどいつでもモビリティを経験しているのである。ナイジェル・スリフト(2006)によると空間でさえ、こうしたモビリティに特徴づけられている。『あらゆる空間はつねにモビリティのもとにある』と彼は書いている。もちろんアンソニー・ギデンズ(2000:1)が語っているように、モビリティそのものはとくに『新しい』ことではない。しかし、確実に『新しい』ことが世界で生起しつつあるのだ。

ジョン・アーリは、こうしたモビリティの特徴を「モビリティ・パラダイム」として整理している¹⁹⁾。このようなグローバルなモビリティは現代における私たちの生^{life}を変容させ、それらがいともなまれる舞台^{settings}となる社会に対しても大きな影響をあたえるようになってきている。アンソニー・エリオットとジョン・アーリはその著『モバイル・ライブズ——「移動」が社会を変える』において、そのことを以下のように表現する²⁰⁾。

人びとが今日みずからの生を営むあり方は、グローバルなモビリティ・プロセスのより広い変動に影響され、それを映し出しているのである。さらに言えば、世界をさらに移動するようになること——炭素をエネルギー源とする、人、品物、サービス、観念、情報の移動が加速していくこと——は、生が営まれ経験され理解されるあり方に影響をあたえるのだ。……(中略)……われわれが思うに、モビリティーズに関する新たなグローバルな語りにおいて、生は再形成され変容しつつある。

イギリスの社会学者ジョン・アーリは、「社会的なもの」の在処がこれまでの(移動しないことを基

本とする)「社会」から、「モビリティ」へ変化しつつあると主張し、「モビリティとしての社会」という概念を提唱している²¹⁾。「社会を越える社会学」を標榜するアーリの主張については、もちろん、より丁寧な検討を加えていく必要があるだろう²²⁾。実際アーリのように「既存の社会」と「モビリティ」を対比的に捉えることが適切なのかについては、よく考えていくべきである。

かつて近代の成立とともに、社会学は「社会的なもの」の位相を把握しようと「社会の発見」に至った。その中で「社会学」は、ディシプリンとして制度化されていく²³⁾。この「社会」が内包するもの、すなわち「社会のコノテーション」がいまや「モビリティ」を含みこんで、新しいダイナミックな胎動を見せ始めているのだとすれば、「既存の社会」と「モビリティ」を対比的に捉えるのではなく、「既存の社会」そのものに「モビリティとしての社会」へと至る契機がすでに内包されていたと考え、「社会」と「モビリティ」を密接に絡み合う関係性の中で捉えていくべきであろう。

以上のことも含め、アーリの批判的検討を今後さらに精緻に行っていく必要があると思われるのだが、あえてアーリのひそみに倣うとするならば、現在「社会的なもの」は、モビリティ、とくにツーリズム・モビリティにおいて明白に現れるようになってきていると考えられないだろうか。

さらにモビリティは、新たな段階に入りつつある。モビリティにおいては現在、「デジタル革命」を経たメディアが果たしてきた役割を無視して論じることができなくなっている²⁴⁾。デジタルテクノロジーがモビリティにおいて重要な役割を果たすということは、モノのモビリティの現れ方においても顕著に表れている。RFID (Radio Frequency Identification) を用いた物流なども、これに相当するものである。RFID とは、商品などのモノに ID 情報を埋め込んだ IC タグをつけ、電磁波を用いた近距離の無線通信によって、接触することなくモノの情報やデータをやりとりする自動認識技術を言う (このテクノロジーを用いているものとしてよく知られているのが、JR 東日本で 2001 年に導入された交通系 IC カード「Suica」である)。このテクノロジーは近年では物流システムにも積極的に応用されるようになっており、商品が「いつ、どこにあったのか」「現在どこにあるのか」「それは、どのような状態なのか」等に関するデータが収集できるようになる。このデータの最適解を AI によって解析すれば、必要な場所へ何をいかにして、どれほどの量で移動させるのかが計画できる。

そうなれば、コンビニエンスストアの店舗で AI 搭載ロボットに IC タグのデータを読みとらせ解析させたうえで商品の発注・返品・廃棄を行ったりすることも可能となり、物流のあり方は大きく変わっていくことになるだろう。それだけではない。IC タグを読みとるメガネをつけると商品を手にした人がモノの履歴を読みとれたり、AI 搭載型の洗濯機が洗濯物の IC タグから情報・データを読みとり最も適切な洗濯モードを自動選択できたりする。

デジタルテクノロジーによる情報・データのモビリティによって大きなインパクトを受けたモノのモビリティのあり方が、現在の社会を、そして私たちの生^{life}を変えているのである。モビリティがデジタルテクノロジーと出会うことで、モノと人が、まるで人と人が「会話」するようにコミュニケーションし合うようになる。そのことによって、まさに人のあり方も新たな様相——モノ、環境、動物等と積極的に関わり合う「人新生」時代の人——へと変容していくのだ²⁵⁾。

モビリティがデジタルテクノロジーと強く結びつくようになったことについて、アンソニー・エリオットも立命館大学人文科学研究所主催の講演会「モバイル・ライヴズとその後 (MOBILE LIVES AND AFTER)」(2018 年 10 月 24 日開催)において論じている。彼は 20 世紀後半以降のモビリティを、以下のように 3 段階に分けている。

①モビリティ 1.0: これは、人、モノ、資本、情報、観念、技術等が移動する状況が常態化するよう

になったグローバル社会が生成するようになった時代である。

②モビリティ 2.0: 人、モノ、資本、情報、観念、技術等が移動する状況が常態化するようになったグローバル社会によって、私たちの生のありようが大きく変容し始めるのが、この時代である。この時代では、私たちの自我形成もスマートフォンなどをもちいた情報の移動等と切り離せないものとなる。また家族や人間関係、さらにライフスタイルも移動（モビリティ）に大きく規定されるようになる。

③モビリティ 3.0: それは AI やロボット工学など、デジタルテクノロジーがすすみ、それによってモビリティのありようが、これらの技術と深く絡み合いながら進化=深化をとげていく段階である。

「モビリティ 3.0」の段階において、ツーリズムも大きな変容を遂げつつあり、デジタル情報技術などを用いながら都市のあり方を新たなかたちへと変容させている。例えば AR のメディア技術が用いられ、現実世界と仮想世界を融合させ、都市を観光する体験が創出されるに到っている。いまや都市の現在形は、ツーリズム・モビリティとデジタルテクノロジーを抜きにとらえることはできない。「モビリティ 3.0」時代ともいべきモバイル=デジタルな時代にあって、AI や AR などをはじめとしたデジタルテクノロジーがツーリズムに内在することで、都市、あるいは都市経験や都市体験のあり方を大きく変容させつつあるのではないか。

たとえば、いくつかの企業では、観光施設向け「多言語 AI チャットボット」が開発されている。観光客は、スマートフォン・アプリにおいて話しかけたり、文字を打ち込んだりしながら AI とコミュニケーションを行う。そうすることでホテルがこのシステムを導入している場合には、観光客は、チャットボット（自動会話プログラム）を通じて、チェックインとチェックアウト時間、ホテルまでのアクセス情報、部屋内のネット環境、アメニティの内容等のホテル情報を得たり、宿泊を予約したり、モーニングコールを設定したり、宿泊している部屋の清掃を依頼したりできるのである。しかも、それは 24 時間休みなく、日本語だけではなく英語、中国語、韓国語等の多言語にも対応できるものとなっている。

他にも、AI を搭載したヒューマノイドロボットが多言語で道案内をしてくれる観光施設、それら



図6 AI を搭載したヒューマノイドロボットが相席してくれる東京渋谷のカフェ
資料出典：<https://www.shibukei.com/headline/14658/> (2020.09.17 アクセス)

ロボットが相席して会話に応じてくれるだけでなく占いやミニゲームで遊べたり（ときには踊ってくれたり）するカフェもあるし、それらロボットがフロント係やコンシェルジュとして働いているホテルもあり、そこに宿泊することによっても、ひとつの都市体験が形づくられている。

このように考えるならば、「モビリティ 3.0」時代における都市研究は、モビリティとデジタル革命が相互に絡まり合い同時に進展していく状況を射程におさめていく必要があるだろう²⁶⁾。それは、アーリによる「社会を越える社会学」の議論をさらに越えていくようなものとなるに違いない。

注

- 1) ジンメル, G. (酒田健一・熊沢義宜・杉野正・居安正訳) (1994) 「大都市と精神生活」、『橋と扉』、白水社、269-285。
- 2) ゴフマン, E. (丸木恵祐・本名信行訳) (1980) 『集まりの構造——新しい日常行動論を求めて』、誠信書房。
- 3) だからこそ東京へ行くという行為も、ただ物理的にその場所へ行くということを意味しているのではない。「上京」という、その行為の中には、様ざまな「想い」がこめられている。実際、そういう曲もたくさん歌われてきた。Mr. Children の「星になれたら」では、自分のいた街を出ていき上京する想いが歌われているし、シャ乱 Q の「上京物語」では、彼女を残して上京する男性の想いが歌われている。

Mr. Children 「星になれたら」

この街を出て行く事に決めたのはいつか君と
話した夢の続きが今も捨て切れないから
何度も耳をふさいではごまかしてばかりいたよ
だけど今度はちょっと違うんだ昨日の僕とは
こっそり出てゆくよ だけど負け犬じゃない

シャ乱 Q 「上京物語」歌詞

「東京」へ向かう 僕を見送る 君の言葉はない
So 時として 恋人の二人には
愛の深さ計る事件があり
So 別れるの 別れない二人には
愛の答え出せず離れてゆく
悲しいね

ほかにも、KANA-BOON の「東京」、銀杏 BOYZ の「東京」、くるりの「東京」など、上京や東京に関わる曲は数多くある。これらをデータとして、「上京」をめぐる流行歌をデータとして収集し歌詞分析したうえで、『上京』という都市経験の変容——流行歌の歌詞からみる『上京』物語』に関する分析を次の課題として行いたいと考えている。見田宗介という社会学者は『近代日本の心情の歴史——流行歌の社会心理史』という本の中で、時代を映す鏡として流行歌をとらえ、社会や時代を分析するためのデータとして用いているが、『上京』という都市経験の変容——流行歌の歌詞からみる『上京』物語』に関する分析は、歌詞分析という手法を用いた都市社会学的な研究となろう。

見田宗介 (1978) 『近代日本の心情の歴史——流行歌の社会心理史』、講談社。

- 4) KISS というアメリカのロックバンドも、都市の中の人びとの「想い」を歌にしている。「デトロイト・ロック・シティ」という曲がそれである。キスのオリジナルメンバーの多くはニューヨーク出身だが、この曲では自動車産業でかつて栄えたものの、いまはラストベルトに位置するアメリカ合衆国デトロイトで生きる若者たちの「想い」が奏でられている。

KISS 「デトロイト・ロック・シティ」 歌詞

Get up!

Everybody's gonna move their feet

Get down!

Everybody's gonna leave their seat

You gotta lose your mind in Detroit Rock City

5) その意味で都市は、近代社会や、その中で生きる人々のありようを先鋭に映し出す鏡なのである。だからこそヴァルター・ベンヤミンという思想家もまた、パリという都市のパッサージュを遊歩する^{遊歩者} フラヌールの視線をもって、近代社会の^{ファンタスマゴリ} 幻像とそこからの救済を見出したのである。以下の文献を参照。

ベンヤミン, W. (今村仁司・三島憲一他訳) (2003) 『パッサージュ論 第1巻』、岩波書店。

6) 以下の文献を参照。

大澤真幸 (2019) 『社会学史』、講談社。

加藤政洋・大城直樹編著 (2006) 『都市空間の地理学』、ミネルヴァ書房。

7) Park R.E. & Burgess E.W. (1925) *The city: Suggestions for investigation of human behavior in the urban environment*, Chicago: The university of Chicago press.

8) アンダーソン, N. (広田康生訳) (1999 (上)・2000 (下)) 『ホーボー——ホームレスの人たちの社会学』、バーベスト社。

9) ゴーボー, H.W. (吉原直樹・桑原司・奥田憲昭・高橋早苗訳) (1997) 『ゴールドコーストとスラム』、バーベスト社。

10) シカゴ学派は第1世代から第4世代に分けることができる。第1世代は、後に「Big Four」と呼ばれる A.W. スモール、G. ヴィンセント、C.R. ヘンダーソン、W.I. トーマスを中心とするシカゴ学派創設期のメンバーである。第2世代がシカゴ学派の「黄金時代」を築いた研究者たちで、R.E. パーク、E.W. バージェス、W.F. オグバーンたちである。第3世代は、第2世代の教え子たちで、シカゴ大学のスタッフになった研究者たちである。この世代に相当する H.G. ブルーマーと E.C. ヒューズはそれぞれ「シンボリック相互作用論」の創始者に、L. ワースは、パーク・バーージェスによって築かれた「都市社会学」の発展に貢献した。第4世代は、第3世代の教え子ではあるが、彼らの何人かは次第にシカゴ大学から離れて活躍する。具体的には、レイベリング論で著名な H.S. ベッカー、A.L. ストラウス、E. ゴフマンたちである。

11) 加藤政洋・大城直樹編著 (2006) 『都市空間の地理学』、ミネルヴァ書房。

12) 遠藤英樹 (2011) 『現代文化論——社会理論で読み解くポップカルチャー』、ミネルヴァ書房。

13) デイヴィス, M. (村山敏勝・日比野啓訳) (2008) 『(増補新版) 要塞都市 LA』、青土社。

14) Scott, A.J. & Soja E.W. (1996). *The city: Los Angeles and urban theory at the end of the twentieth century*, California: The university of California press.

シカゴ学派のパークやバーージェスたちによる『The city』を意識してスコットとソジャによって編集された上記の書物には、社会学者のマイク・デイヴィスや建築理論家のチャールズ・ジェンクスたちも寄稿しており、ロサンゼルス学派の集大成的な位置づけの書物とも言えるものである。

15) 園部雅久 (2001) 「21世紀の都市——ポストモダン都市論のリアリティ」、金子勇・森岡清志編著『都市化とコミュニティの社会学』、ミネルヴァ書房、32-47。

16) Hannigan, J. (1998). *Fantasy city: Pleasure and profit in the postmodern metropolis*. London: Routledge.

17) 堀野正人 (2014) 「アーバンツーリズム」、大橋昭一・橋本和也・遠藤英樹・神田孝治『観光学ガイドブック——新しい知的領野への旅立ち』、ナカニシヤ出版、196-199。

18) Adey, P. (2017). *Mobility (second edition)*, Oxford: Routledge, 1.

19) アーリ, J. (2015) (吉原直樹・伊藤嘉高訳) 『モビリティーズ——移動の社会学』、作品社、74-86。

20) エリオット, A. & アーリ, J. (遠藤英樹監訳) (2016) 『モバイル・ライブズ——「移動」が社会を変える』、ミネルヴァ書房、ii。

- 21) Urry, J. (2000). *Mobile sociology*. *British Journal of Sociology*. 51 (1), 185-201
- 22) アーリ, J. (吉原直樹監訳) (2006) 『社会を超える社会学——移動・環境・シチズンシップ』、法政大学出版局。
- 23) 佐藤俊樹 (2011) 『社会学の方法——その歴史と構造』、ミネルヴァ書房。
- 24) Endo, H. ed. (2020). *Understanding tourism mobilities in Japan*, London: Routledge
- 25) 以下の文献を参照。
篠原雅武 (2018) 『人新世の哲学——思弁的实在論以後の「人間の条件」』、人文書院。
篠原雅武 (2020) 『「人間以後」の哲学——人新世を生きる』、講談社。
- 26) したがって都市のかたちを考えることは、当然、グローバルな世界のかたちを考えることにもつながっているのである。たとえば東京、ニューヨーク、ロンドンという都市において、どのような金融的な取り引きが行われているかで世界の経済は大きく変わる。このようにローカルな場所でありながら、同時に、その場所における行為や利害が、グローバルな世界における行為や利害にダイレクトに結びつき、影響をあたえるような都市を、サスキア・サッセンというアメリカの社会学者は、「グローバル・シティ」と言う。グローバル・シティにおいては、都市は、ある国の中のローカルな場所であるにとどまらない。それは、グローバルな世界システムの内部に組み込まれ、その世界システムそのものの行方を変えてしまうような力をもつ場所なのである。つまり、ローカルであることによってグローバル、グローバルであることによってローカルである街、それがグローバル・シティの特徴である。
サッセン, S. (伊豫谷登土翁監訳、大井由紀・高橋華生子訳) (2018) 『グローバル・シティ——ニューヨーク・ロンドン・東京から世界を読む』、筑摩書房。

(本学文学部教授)

Mobility Turn of Urban Studies: Beyond “Sociology beyond Society”

by

Hideki Endo

Looking back at the history of urban sociology, one realizes that the reason why urban sociology garnered so much popularity in early 20th century Chicago was because the city was closely linked to the conditions of society. At the time, during the late 19th to early 20th century, many immigrants had flocked to Chicago from Eastern and Southern Europe, and these immigrants were causing a great shock to American society. Later, as the city of Los Angeles underwent significant changes due to the influx of Hispanic immigrants, the concentration of multinational corporations such as tech companies, and the consequent mobilities of people, things, capital, and information, among other diverse elements, the center of urban studies shifted from Chicago to Los Angeles. By the late 20th century, the mobilities that had transformed cities became increasingly intense, and mobility itself became inextricably linked with digital technology. Today, the field of urban studies needs to extend its scope to examine the simultaneous and intertwined development of mobility and the digital revolution. This will enable us to go even further than Urry’s idea of a “sociology beyond society.”